

世界の世界性の視点依存性テーゼ ／世界の多重入れ子構造について

京念屋 隆史

世界の世界性の視点依存性テーマ

初めに結論を提示しておく。

ある世界が世界性をもつかどうかは、その世界が内側から生きられるか、外側から眺められるか、という観測者の視点に依存する

外側からの眺め

想像された世界には世界性がない

内側からの信憑

想像された世界にも世界性がある

想像された世界には世界性がない

これはサルトルの準観察テーゼのこと。サルトルにおいて知覚と想像の差異は、最終的には、知覚された世界には世界性があるが、想像されたものには世界性がない、という一点に集約された。ここでの「世界性」とは次の三点にまとめられる。

- 細部がない
- 既在性がない
- 射映性と地平性（＝奥行き）がない

想像された世界にも世界性がある

こちらの立場はまだ誰も主張していないので、目前で主張を立てなければならない。サルトルの準観察テーマに対する反論という形をとって、想像も真性の世界性を備えていることを主張する。さしあたり、前者の反論1をさらに展開させる。

- 反論1：世界性を持つような想像もあるのではないか
 - 例) 子供の空想。一連の長いストーリーをもった「続きもの」の想像。
 - 子供はしばしば、昨日行った空想の続きを今日も考えることで、**同じ世界に何度も何度も入り直して**、その世界の細部をどんどん豊かにしていく
 - これは、我々が昨日も今日もこの同じ知覚世界の中に入りてその細部を観察によって満たしていくのと同じこと。想像も知覚と同じような真正の世界性をもつ
- 反論2：世界性を持たないような知覚もあるのではないか
 - 例) 知覚に対する現象学的還元、とくに形相的還元
 - これは**世界性をもたない知覚**というものを作り出そうとする試みではないか

世界の細部を後から埋めることは発見なのか事後的創作なのか

一つの思考実験を例にとって、想像の世界性を否定する立場と肯定する立場との対立を浮き彫りにする。

思考実験：空想されたお城の3階には何があったか

空想の「世界」の中で立派なお城に住んでいると言い張る子供に対して、「じゃあ、そのお城の三階部分には何があるの？」とその父親が聞く。子供はとても長い間沈黙した後に、「……ああ、そうだ、使用人が泊まる宿舎があるんだった」と答えた。しかし実際にはその子供は、大人にそう聞かれるまでは、お城に複数の階があるなどという発想すら持っていなかった。だから大人は「いやいや、いま考えたでしょ」といつて茶々を入れた。しかし子供は、「いいや違う、いま僕が考えたわけじゃない、元からそうなっていたんだ」と答えた。

大人vs子供の対立：既在性をめぐる争い

同じ論点をめぐって真逆の主張がなされている。お互いに相手の主張の意味を完全に理解でき、かつ結論だけが真逆であるため、調停は不可能。

大人

- 大人：「いやいや、いま考えたでしょ」
 - 元から既にそうなっていたお城の上階をいま観察して発見したわけではなく、いま新たに創り上げただけでしょ
 - 想像には**既在性**という世界性の本質が欠如している、という反論

子供

- 子供：「違う、元からそうなってたんだ」
 - 今まで気づかなかっただけで、いま観察して見つけたんだ。僕が勝手に考えたわけじゃない
 - 想像された世界は私が見る前から既にそこにあったのであり、私はそれをただ発見ただけだ、という主張

子供の逆襲：視点そのものが複数存在することの示唆

先ほどよりちょっと賢い子供を想定する。大人の側の主張の妥当性を全て認めたうえで、その主張の根拠をなしている立脚点そのもののずれを指摘する。

「お父さんの言っていることは分かるよ。それでも僕は毎日、自分の想像の世界の中に入って、そのお城の中で生きてるんだ。お父さんがそうやって言うのは、僕のこの世界の内に一緒に入らないで、それを外から眺める醒めた態度を取ってるからでしょ？」

- 空想のお城のあるその世界はほんとうに世界性を備えているか否か、という世界性の有無をめぐる対立があるのではなく、ただ、その当該の世界を内側から見るか外側から眺めるか、という視点の対立だけがあるのだ

対立の真の意味：世界の世界性の視点依存性テーマ

空想の世界と同じことがフィクションの世界についても妥当する。子供のさらなる追撃。

「それに、お父さんだって、いつも楽しみにしている連載小説の続きを読むときは、今まで明らかになっていなかった世界の細部がいま初めて明らかにされた、という態度で読むでしょ？僕が「へー、作者は今週はこういう設定でこう創ってみせたんだね」って茶々を入れたら怒るじゃん」

- いかなる世界も、内側から生きられたときには真正の世界性をもつ世界として現れ、外側から眺められたときにはただの自由で恣意的な作り物に見える
 - 多世界構造にまつわる本発表の議論全体は、ある像が心的像であるか物的像であるか（想像であるか フィクション作品であるか、等々）を選ばない

唯一の客観的世界の絶対性：世界性の視点依存性テーゼへの反論

これで先ほどの対立は調停されたが、しかし、話はこれで終わりにはならない。今度は、想像世界にもフィクションの世界にもインフレ的に認められた世界性に対して、以下のような反論がありうる。

フッサール的な反論：唯一の客観的世界の絶対性

「確かに子供の言うことには一理ある。どんな世界も、虚構世界であろうと、それが内側から生られたときには真正の世界性をもつかのように感じられることがあるだろう。しかし、だからといって、その想像世界やフィクションの世界が**客観的な世界性**をもつ、ということにはならない。世界、と言えるのはこの世界、知覚された世界であり、これは、どの主觀がどの時点から見ても同一性を保ちつづける、客観的にして唯一の世界である。だから、仮に想像ないしフィクションの諸世界を"世界"と呼んでやるとしても、それは真性の意味での世界性、この知覚世界の世界性には及ばない」

視点依存性vs客観的世界の絶対性：高次の対立への移行

この対立は先ほどの大人と子供の対立より高次の段階の対立。大人と子供の対立の調停によって得られた高次のテーゼに対して、さらに高次の反論によって、視点依存性テーゼが考慮していなかった問い——想像世界とこの知覚世界との差異を説明せよ——が突きつけられる。

視点依存性テーゼ

ある世界が世界性を持つかどうかは、その世界が内側から生きられるか、外側から眺められるか、という視點に依存する

客観的世界の絶対性

この知覚世界だけが唯一の真正な世界であり、想像や世界こそがどの主観がどの時点から見ても（非視点依存的に）唯一の客観的世界である

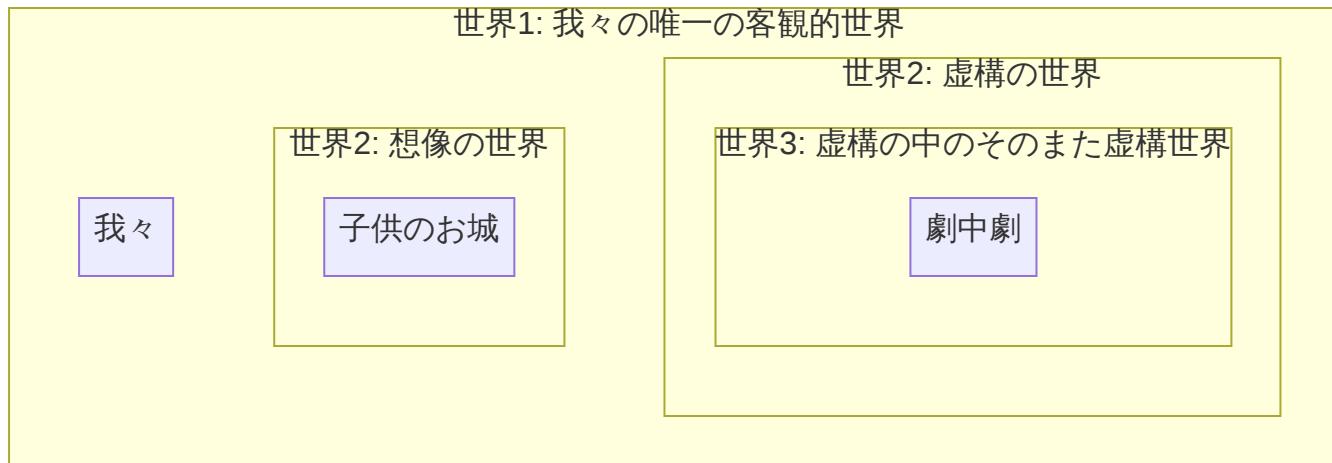
知覚／想像の識別問題の再発：視点依存性テーゼの欠陥

- 「本当の意味で世界と呼べるのはこの知覚世界だけだ」：
 - もし想像も知覚と同じく一つの世界を開く作用であるなら、同じ世界を開くもの同士、どのようにして想像は知覚から識別されているのか分からなくなってしまうではないか。
 - これは視点依存性テーゼが考慮していなかった論点。手痛い反論であり、このテーゼの枠内では応答不可能な問い
 - この識別の問題を、客観的世界の絶対性テーゼは、いったんは想像にもフィクションにもインフレ的に認められた世界性を（この知覚世界の世界性から差別化するために）貶めることによって解決しようとする。「それらは百歩譲って世界であるとしても、我々のこの世界のような真正の世界ではない、たかだか準一世界にすぎない」といったように。

世界の多重入れ子構造

次のような世界の入れ子構造を考えてみてほしい。

- 世界1：最も外側にある我々の知覚世界。いつ誰がみても同一の、唯一にして客観的な世界
 - 世界2：この世界1の内側に入れ子になって成立している、想像やフィクションの世界
 - 世界3：例えば、フィクションである演劇のさらに内側で演じられた劇、劇中劇の世界



観入と上昇による世界移動：世界性の視点依存性テーゼ改

この多重入れ子構造を念頭に置いて、視点依存性テーゼと客観的世界の絶対性テーゼの両方を説明する。まずは視点依存性テーゼのほうから。

- **初期位置**：我々のいる初期位置は世界1、つまりこの知覚世界だ。ここに居ながらにして世界2、例えば誰かの空想についての話を聞かされると、我々はそれを観察された世界ではなく恣意的な作り物にすぎない、と感じる。これは、世界2をその外側である世界1にいる我々が捉えるからだ
- **観入**：しかし、ひとたび彼の空想の世界の話に我々が深く聞き入り、観入し、その世界の内で生きるようになったときには、我々は世界1から世界2に移動して、世界2をその内側から眺める。このとき、内側から生きられた世界2は、同じく内側から生きられているこの世界1と同じような世界性をもつように体験される
- **上昇**：しかし、空想世界2への没入が中断され、ふたたび元いた我々の知覚世界1へと上昇したときは、ふたたび、「あれはただの空想にすぎなかった」というように醒めた仕方で体験されなおす

なぜ我々の知覚世界は唯一にして絶対的な客観的世界なのか

それは視点に依存しないのではなく、たまたま外側の視点がないからではないか？この知覚世界が絶対的に見えるのは、我々がそれに対して内側から生きることしかできない、というまさにその内側の視点に依存しているのではないか？

- 答え：我々のこの知覚世界は、入れ子になった諸世界のうち最も外側の世界だから。この世界1よりも外側にあるような、より上位の世界というものがもはや存在しないから
 - 空想の世界（世界2）の外に出てそれを外側から眺めるようにして、我々のこの知覚世界（世界1）の外に出ることはできない
 - ゆえに我々はこの知覚世界をただもっぱらその内側から生きることしかできない。我々は内側から生きられたときのこの世界をしか知らないので、その世界性は他と違った絶対的な（外側から眺められ無化されることのない）世界性をもつよう見えててしまう

知覚と想像の差異の識別問題への答え

想像は知覚と何によって識別されているか、という問い合わせについても、この視点依存性テーゼの単なる系として導出できる。

- 答え：ある**世界越し**に観られた世界、それが想像された世界である。そうではなく直接見られた世界が知覚された世界である
 - 観入とは、正確に捉えるなら、世界1にいる我々が世界2の内へと完全に移動してしまうような経験ではない。世界1に軸足を残したまま世界2の中に入ること、あるいはむしろ、世界1を額縁として、そこに嵌め込まれた世界2の中に入ること、これが観入である
 - だから私は観入しているとき、私はいま「入って」いるにすぎない、ということを識っている。すなわち、この目の前に展開されている真正の世界は、どんなに真に迫るものに感じられようとも、しかしその外部がある、ということ、それゆえこれは入れ子にされた世界にすぎないことを、**その当の入れ子の内側から**識っている
 - 「その当の入れ子の内側から識っている」がゆえに、上昇して外側に出るまでそれがフィクションだと識らなかった、ということは起こらない

次の議論への移行：視点依存テーゼから見た現象学的還元

世界性の視点依存テーゼの観点から、フッサールの現象学的還元とは何かを再解釈することができる。

- 世界をその外側から眺めること（そのために世界の内側に入ってその内で生きる態度を一時中断すること）、これはフッサールの言う現象学的還元に似たところがないだろうか
 - 世界の内側からの信憑／外側からの眺めはそれぞれ、フッサールの言う自然的態度／超越論的態度に対応するのではないか
- しかし、世界1の外側なるものはもうないはず。ない外側になど出ることなどできようか？
 - このことが、還元という操作が実践的には困難、ないし原理的に不可能だと多くの批判を受けてきた要因ではないか
 - その「世界0」に当たるのが「超越論的意識」ということになるか？

次の議論への移行：多世界構造から見た現象学的還元

世界の多重入れ子構造の議論が現象学的還元の理解可能性にアシストをしてくれる。

- しかし他方で、そのようにして「還元は不可能だ」と不平を言う人たちでさえ、還元とは何をすることなのかをなぜか了解てしまっている
 - これは、我々が**還元によく似た現象**を知っており、現象学者でなくともときどき実践しているからではないか
 - つまり、世界1を外側から眺めることが不可能だとしても、世界2（想像、フィクションの世界）を外側から眺めるのは全然可能だから
 - 入れ子にされたほうの世界からの類比によって、あらゆる入れ子の外側にあるこの世界全体の還元という操作が理解可能になっている
 - 世界2：世界1=世界1：世界0

外側からの世界の眺め：準観察テーゼの復活

還元によって得られるという世界の外側からの眺めとはどんなものか。この問いに答えるため、サルトルの準観察テーゼを変形させた形で再復活させる。

- 視点依存性テーゼのおかげで、サルトルの準観察テーゼ（想像には世界性がない）はむしろ完全に復活させることができる。すなわち準観察テーゼは、**ある世界をその外側から、世界越しに眺めたときの眺め**の記述としては完全に正しいことになるだろう
 - つまり、サルトルの言う「想像」は、実質的には、「外側から眺められたときの世界」ということしか意味していない。ゆえに彼の言う「想像」という語を「外側から眺められた世界」と置き換えて読むことができる
 - 「想像された世界には射映性がない」：これは偽
 - 「外側から眺められた世界には射映性がない」：これは真！

外側からの世界の眺め：準観察テーゼから還元へ

- 「外側から眺められた世界は世界性をもたない」（準観察テーゼ改）
 - こう捉えれば彼の準観察テーゼを救えるどころか、これが想像だけに限定されたテーゼではない、任意の世界をその外側から見たときの眺めに妥当するテーゼとして生まれ変わる
 - ということは、この知覚世界（世界1）をその外側から眺めることができたなら、その外側からの眺めについても、サルトルの準観察テーゼが妥当するのではないか？
- すなわち、還元された後の世界は世界性を持たない！？
 - 無限の細部をもたない！？
 - 射映しない！？
 - 地平性をもたない！？
 - 既在性がない！？

準観察テーゼ再論：失われる世界性の三つの要素

外側から眺められた世界が失うもの一覧。

- 世界が外側から眺められたとき世界性を失うなら、世界性の本質を成している次の三つの性質もまた失われることになるだろう。（そして、同じく**知覚世界もまた**、外側から見られることができたときにはこれらの性質を失うだろう）
 - 既在性を失う：これは理解しやすいし、大人と子供の対立のところですでに見た。すなわち「いま新たに主觀が自由に創り出したにすぎない」といったふうな見られ方をする
 - 無限の細部を失う：これは**概念的なものとの近さ**を生み出すのではないか〔→後述〕
 - 奥行きを失う：これはほとんど理解しがたいだろう。奥行き（射映性、地平性）をもたない表象とは何なのか
 - このことは、必ずしも全ての表象が世界構成的であるわけではない、**世界構成的でない表象**というものもある、ということから理解される〔→後述〕

世界性がないとは形相的であることだ：準観察テーゼの発展形

外側から眺められた世界が得るもの一覧。「想像には世界性がない」というもっぱら否定的だったテーゼの肯定的側面。

- 想像とは概念的本質を直接観て取らせる（＝本質直観させる）ような作用である
- 余計な細部をもたないことによって、概念的本質を直に見てとることができる
 - 知覚をもとに本質直観をしようとすると、「自由変更」という事実的細部を捨象していく操作を経なければならない
 - しかし想像はそのような捨象されるべき細部をあらかじめ持たない。この貧しさが概念を表示するときには逆に有利に働く
- 想像とはいわばあらかじめ形相的還元が済んでいるような表象のことである
 - このような表象を「形相的表象」と呼ぶことにする

世界構成的でない表象：形相的表象①

奥行き（射映性、地平性）をもたない表象、世界構成的でない表象などというものがあるのだろうか、と疑う人がいるかもしれない。だがそれは我々の身近なところの事実存在する。ここで、物的イメージの中に世界構成的でない表象を探してみよう。

辞書の挿絵の例

辞書の挿絵、例えば「猫」という項目の脇に書かれたイラストの猫を考えてみよう。さて、この挿絵に対して、で、ちょうど小説や映画の世界に観入するように、この猫の挿絵の世界の中に観入しながらそれを観る人というのはいるだろうか。いないだろう。

- 猫の挿絵は観者をその世界の中に入り込ませるために描かれた像ではなく、ただ猫という概念、猫の本質を図式的に表示するためにのみ描かれた像だから
 - ここで、世界性と概念性という対比があることに留意されたい

奥行きのない平坦な表象：形相的表象②

猫の挿絵という世界性をもたない表象に対して、我々がとる態度は変わる。我々はその絵に観入的な態度、「世界に対する態度」を取らない。

- 插絵には射映性がない
 - 夜道で猫に出会ったが、しかし近寄ってよく見てみるとビニール袋にすぎなかった、と後から判明することがある（知覚における錯覚の例）
 - これは同じ対象が複数の射映的な現れ方をもったということ
 - しかし、猫の挿絵に対して「いや、よくよく見てみたらこれはビニール袋に過ぎないかもしれない」などと疑う人はいない
- 插絵には地平性がない
 - 我々の知覚野の限界の先（左右や背面、奥行き）にも世界が開けているという信憑がある
 - しかし插絵には、その插絵に描かれた範囲の左右には何もなく、奥行きもない。插絵はのっぺりと、平坦に描かれている
 - この奥行きの遮断（地平的志向性の括弧入れ）と平坦化こそが形相的表象の本質

形相的表象vs世界構成的表象

- 以上の議論は一つの意外な繋がりを明らかにしてくれる。それは「概念的なものとは、ある世界をその外側から眺めたときの、その外側からの眺めのことである」ということだ
 - 挿絵の世界性のなさ、平坦さこそが概念を表示するという役目をよりよく果たしている

形相的表象

- 世界性がない
 - 志向性がない、意味しかない
- 外側から眺められた世界
- のっぺりと平坦に眺められている
- 細部が欠如している
- 形相的

世界構成的表象

- 世界性がある
 - 志向性がある、世界へと向かっている
- 内側から生きられた世界
- 地平的な奥行きがある
- 無限の細部がある
- 個別的

二つの還元の同一性：形相的還元は現象学的還元である

- 外側から眺められた世界は、奥行きを失って、平坦に、形相的に現象する
 - 現象学的還元：世界をその外側から眺めること
 - 形相的還元：対象をその形相的本質において捉えること
- つまり、二つの還元は同じことを目指している
 - 想像された世界（世界2）への観入的態度を括弧に入れて、上昇すれば、その世界は奥行きを失って、形相的に捉えなおされる
 - 現象学的還元をすれば形相的還元も自動で実行される
- しかし、世界1をその外側から眺めること（=現象学的還元）はやはりできないはず
 - しかし、形相的還元ならできる。それも、単なる細部の捨象としての形相的還元ではなく、地平的志向性の遮断と平坦化として捉えなおされた形相的還元なら、現象学的還元の等価の操作にだってなれるはず

還元された後の世界はどのように見えるのか

「世界」という捉え方そのものの視点依存性。「世界」なるものが存在する、というのはその当該の世界の内でしか妥当しない見方にすぎないのではないか。

- 還元された後の世界には世界性がない（∴準観察テーゼ）。世界は括弧に入れられることでその世界性を失う
 - それゆえ「還元された後の世界」という言い方は若干不適当で、やはりフッサーの言うように、還元された後のものることは「現象」「純粹現象」とか読んだほうがいいことになる
- 「知覚対象は無限の細部と奥行きをもち、私が観察する前から既にそうなっていたものが観察によって発見される」という、世界性にまつわる真理があった
 - しかしこの、対象の現実存在にまつわる真理と思われたものは、実は、我々が自然的態度の中にいるとき限定の一つまりこの世界1の内側に没入してその中で生きる視点を取っているときにしか妥当しない— 視点依存的な真理なのではないだろうか

還元された後の世界はどのように見えるのか

形相的還元によって現象学的還元を遂行する方法。世界の外に出ることなく外側からの眺め（=形相的表象としての世界）を得ること。

- 我々はこの無限の観察可能性を遮断することができる。それは、対象をその概念的本性において捉え、フッサー尔的に言えば「本質直観」をすることによってだ
 - それによって、対象が、近づいて見たり背後に回って見たりしながら無限に射映していく、という無限性を有限化することができる。この本質直観によって対象の対象性をなす地平性が括弧に入れられる
 - それは、机なら机の本質を捉え、「いま分かった、机とは凡（およ）そういう形をしたもの、こういう使われ方をするものだろう」と、いわば対象の本性を見切ることによってだ
 - それ以上観察しようともすでに捉えられた本質以上のものが出てこなくなる瞬間があるはず
- 実際的にも、例えば「対象は無限に射映するものだ」というのは偽ではないか
 - 我々が実際には対象のことを無限に観察することができないのは、我々がその観察可能性にどこかで見切りをつけるから、つまり対象の本質を「見切る」からではないか